

二〇一六年度

京大入試 国語 (文系)

《採点講評》

代々木ゼミナール

※「採点講評」は、設問ごとに以下の観点に沿って記した。

- ① 採点上の基本方針（特に重視した点・留意点など）。
- ② 答案全体の傾向として、評価できる点。
- ③ 答案全体の傾向として、評価できない点。
- ④ 今後の指導上のポイント。

□ (現代文)

問一 [文理共通]

- ① さほど難解でない漢字の書きとり問題では、トメ・ハネが正しく書けているかが基本的な採点ポイントとなる。また、崩さず丁寧に書けているか、筆圧が弱く判別できないほど薄過ぎないかなども重要なポイントになってくる。

- ② (ア) ≪「懸念」、(オ) ≪「行使」はよく書けていた。

- ③ (ウ) ≪「絵空事」の「事」を「言」と書いた受験生が多かった。また、(エ) ≪「迫真」の「真」を「心」と書いた答案も目立った。「迫真」は「真に迫る」と覚えておけば、書き損じを防げる。最も出来がよくなかったのは(イ) ≪「四囲」。「恣意」「四位」などの同音異義語（最も、「四位」は「よんい」と読むので同音ではないが）との間違いや、そもそも「四囲」という語自体を知らない事が誤りの原因だと推測される。「四囲」は「周囲」と同義で、「周りの四方全体」という意味がある。「四囲を圧する」という言い回しを覚えておいてほしい。

- ④ インターネットやメールの普及で文字を「書く」機会はますます減っているが、基礎的な漢字の書きとり問題での失点は絶対に避けなくてはならない。漢字の問題集を一冊仕上げる時間的余裕はないかもしれないが、少なくとも、とり組んだ現代文の問題に出てくる漢字問題は、読み・書きができ、意味がわかるようにしておくことが肝要である。

問二〔文理共通〕

① カーンとポンピアの推論を要約する設問。筆者が「あまりにも魅力的」だと感じている理由、すなわち「太古の海で巨大な月を見つめているオウムガイに思いを致す」ことの裏づけとなる科学的推論としてまとめる必要がある。解答作成の際、柱にすべきは

○オウムガイの殻の成長線は月の周期と一致している
○太古の月は巨大であった

の二点になる。それぞれのポイントに関するカーンとポンピアの説をまとめればよい。

② 全体的に出来はよかった。古いオウムガイほど成長線が少ないことを根拠に、太古の月が地球に近いうところを今よりも短い周期で公転していたという結論を説明できていた。「九太陽日」「地球からの現在の距離のたった五分の二強」など具体的な数字をあげて説明した答案は、要約とは言えないものの、正しい方向性で書けていれば適宜得点を与えた。

③ オウムガイの殻の成長線と月の周期に関する説明が、わかりにくい答案が多かった。確かに、問題文の説明自体が実はあまりわかりやすいものではないのだが、それ

をただ抜き書きしたのではますます意味がわかりにくくなってしまふ。①で指摘したように、「魅力的」と感じる筆者の思いに沿ってまとめる必要があった。

オウムガイの成長線に関する最大のポイントは、現存種のオウムガイの殻には「平均約三十本の細線が含まれること」である。なぜならこれによって、細線の数が一か月の日数に対応している事実がわかるからである。しかし、多くの受験生が問題文の一～五行目の内容を機械的に抜き書きしており、隔壁の数にまで言及したため、かえってわかりづらくなっていた。なお、筆者は「成長線」と「細線」という二つの言い方をしており、これらは同じものを指しているが、別々のものにとらえてしまった受験生も多かったようだ。

④ ポイントがある程度正しく押さえられていても、主述のねじれや因果関係のねじれといった文法的ミスをしてしまうと、当然のことながら減点の対象になる。やさしい設問ほど、記述力がものを言うことを忘れないようにしよう。

問三 [文系のみ]

① 問二でまとめたカーンとポンピアの説と、それに対するグルルドの懐疑論を並べて、なぜ筆者が前者に肩入れしたいのかを説明する問題。傍線部(B)直前の内容をそのまま書けば解答になりそうにも思えるが、もちろんそれでは高得点は望めない。自分の言葉で筆者の心情の解釈を丁寧に示せているかどうか、得点の分かれ目となった。

② 解答に盛り込むべき大きなポイントは、ほとんどの受験生が押さえられていた。

③ 問題文の抜き書きが多く、より踏み込んだ心情説明ができていないため、得点は伸びなかった。まず、かつてオウムガイが巨大な月を眺めていたという点について、「仮説」「推測」とした答案が多かった。確かに問二で「推論」の説明を求められたので、そのまま問三でも同様の語を使ってしまう気持ちはわかるが、グルルドの懐疑論を否定している以上、筆者はカーンとポンピアの学説を事実だと考えている(考えたい)のである。この「事実」の要素は不可欠だった。

さらに、「あまりにも魅力的」の記述を何の説明も加

えずそのまま答案に用いた受験生が八割以上もいた。ここではグルルドの懐疑論と対比させるために、どのような「魅力」を筆者が感じているのかを明らかにしなければならぬ。筆者にとつて、オウムガイが深海から浮上して巨大な月を見ているという「事実」を知ることには、知的興奮や感動がある。問題文の終盤で「確固とした事実」を知り「物質的な証拠」を得ることに「感動する」と書かれている点に留意したい。一方、グルルドの懐疑論は「まことにもつともな点を衝いているのだが」とあるように、筆者にとつても論理的整合性はあるものの、「感動」は与えてくれない。だから、グルルドに「耳を貸す」⇨賛成する⇨ことで「感動」を損ないたくはないのである。この対比の構造を、言葉を補って説明する必要があった。

④ 「あまりにも魅力的」のように、筆者の思いが強く出た表現は、必ず言葉を補ってその意味をより詳しく説明しよう。また、問題文全体の主旨を踏まえながら解答することも大切である。

問四 〔文理共通、理系は問三〕

① 「想像」が「精神の営為として基本的に貧しいもの」という筆者の考えを、問題文全体の主旨も踏まえつつ掘り下げて説明できているかどうかのポイントとなる。さらに、「想像」と対置されるものとしての「現実」に言及できているかも加点の対象となった。

② 「想像」が「現実」の重みや力強さに及ばないという点は、ほとんどの受験生が押さえられていた。また、想像の貧しさについては傍線部二行後に「結局想像されたものでしかない」という記述があるが、この抜き書きに終わった答えはあまり見られず、独自の解答を作成しようとする努力の跡が見られた点はよかった。

③ 「想像」の貧しさを説明する設問であるのに、想像が豊かでも貧しくても……と答案を書き出していた受験生が九割近くもいた。確かに筆者は「想像力が豊富であると貧弱であるを問わず」といった記述を繰り返してはいる。しかし、貧しさを端的に説明する場合には、やはり「豊かさ」と対比させるのが妥当である。どんなに豊かに見える「想像」も、「現実」の重みにくらべれば「貧しい」という主意を提示する方が、より明確な答

案になる。

また、貧しさを説明として、想像は無意味とするに足りないなどの言い換えが目立ったが、これでは表現として弱く説明不足である。問題文末尾の「安っぽい文学的感傷」といった筆者による言い換えに気づき、解答に盛り込んでほしかった。

④ 文末が理由説明の形になっていない答案も散見された。誤字・脱字や文末ミスによる失点など、不用意な失点をしない注意深さが必要である。

問五 〔文理共通、理系は問四〕

① 「わたし」に「感動」をもたらすもの、および「ここ」の具体的説明を、一般化した形でできているかどうか採点のポイントとなった。

② 傍線部以降の内容を要約すればある程度の得点が望めるため、それなりに得点できている答案が多かった。

③ 「ここ」の説明として、「それによってその光を知ることが出来る」の「それ」「その」という指示語が指す内容を説明しなくてはいけないが、これを一般化できていない答案が多かった。傍線部を含む段落の半ばにある

「中天を圧して輝きわたっている巨大な月」を「その光」の説明としてそのまま用いた答案などがあつた。ここで押さえるべきは、

「もはや存在せず、見ることでできないものがかつては存在した」

という「現実」を、「物質的証拠」を通して「知る」とがもたらす「感動」である。筆者はオウムガイの例を通じてそれを感じているのだから、具体例をなぞるだけでは不十分である。

- ④ 文系のみの間三にも言えることだが、(筆者の)心情説明問題が苦手な受験生が多いようだ。問題文の抜き書きでは対応できず、行間を読む力が必要だからかもしれない。しかし、この力は京大を目指す受験生ならば当然求められるものである。行間を読む力は、現代文の問題を解いているだけでは身につかない。インターネット上の表層的な文章にふれているだけでもいけない。本を読むことが必須だ。文系志望の受験生はもちろん、理系志望の受験生も日頃から読書に励み、問題文の背後を深く読みとる力を磨いてほしい。

二 (現代文)

問一

① 「瞬間を相対化する」「時間を手段とする」という表現が言わんとする内容を、具体的に説明できているかどうか、に主眼をおいて採点した。

② ポイントB「時間を手段とする」については、比較的よく説明できていた。

③ 一方で、ポイントA「瞬間を相対化し」はなかなか説明しづらかったようである。今この瞬間に熱中することを避け、熱中に賭けることなく、客観的に捉えるとは書いていても、長い人生の一部と位置づける」といった説明ができている答案はほとんどなかった。したがって、「瞬間を相対化し」という表現が意味する内容がある程度説明できている答案は、内容に応じて適宜加点した。

また、ポイントB「その先にある目的を実現するため」のもの、という要素を、単に「未来のためのもの」と説明するにとどまっている答案も多く見受けられた。

④ 意外と得点が伸びなかったという印象を受けた。ポイントAで高得点が得られなかったことに加え、ポイン

トBでも微妙な表現のニュアンスの違いなどから減点された答案が多かったことが大きな要因であると思われる。理解した内容を適切に表現するための記述力を鍛えていく必要がある。

問二

① 「手すりは切れた」という比喻表現の解釈と、その思いに至るまでの今までの生き方について説明できているかどうか留意して採点した。

② ポイントA ♪何に対しても熱中しない ♪ およびポイントB ♪自らの感情を誤魔化し続けてきた ♪ については、ところどころニュアンスの違いなどで減点されている部分があったものの、概ねよく書けていた。

③ やはり、ポイントC 「手すりは切れた」の説明に手こずったようである。ポイントA・Bを説明した上で ♪もはやそういうった態度がとれなくなった・自分を誤魔化しきれなくなった・言い訳ができなくなった ♪といった説明にとどまった答案が非常に多かった。また ♪熱中することにした ♪ など、漠然とした解答になっている答案も多く見受けられた。「手すり」(♪ 自分を支えるも

の・すぎるもの ♪)のニュアンスまで含めて説明できている答案は少なかった。

さらに、ポイントA・Bで ♪これまでの「私」の態度 ♪ を説明する代わりに、態度を変えようと決意したきっかけや理由について言及した上でポイントCにつなげた答案もいくつかあった。その場合のポイントA・Bは、上限を3点として加点した。ただし ♪今までは… だったが、就職した今は ♪ 大人になって ♪ など、理由の内容が適切でないものは加点対象とはしていない。

④ ポイントA・Bがある程度書けていたためか、思っていたよりは得点できていた印象である。③でも述べたように、「手すりは切れた」状況に至った理由を説明した答案もあったが、傍線部直後に「最早、自らの身体を、自らの力で支えて進む他はない」とあることから、「これまでの私」と対比させた上で ♪態度を変える決意・覚悟をした ♪ ことを説明していく解答が望ましい。このように「どういうことか、説明せよ」というシンプルな問いの場合、何をどう説明するか of 吟味が必要となる。前後の文脈を手がかりに、その内容を絞り込んでいく意識づけの指導が必要だと言えるだろう。

問三

- ① 「樹液の様にみずみずしい」という形容のニュアンスが説明できているかどうかに留意して採点した。
- ② 「かつての労働のイメージ」は、問題文中で「人間が自らの生存と繁殖のために汗する」「単純豪快な労働のイメージ」などと説明されているので、この部分を用いて説明した答案が多く見受けられ、ポイントB「肉体的労働」とポイントC「生存と繁殖のための労働」では概ね得点できていた。
- ③ 一方で、「樹液のようにみずみずしい」の説明にあたる、抽象的な労働との対比（ポイントA）にまではなかなか言及できていなかった印象である。人間の意識が健やかで強固だった時代の「という説明をしている答案は少なからず見受けられたが、これでは「どのような労働なのか」ということまでは説明しきれていない。また、「かつての労働」と対比されるものとして（現代の）デスクワークに見られる抽象的な労働」については問題文中でも説明されているので、少なくともその要素は押さえておきたいところであるが、ポイントAの要素を押さえられている答案は意外と少なかった。

- ④ 文系の受験生であっても、問題文中の記述を抜き出してつないだだけの解答を作成する傾向が多く見られる。比喻表現の説明問題は、文系・理系を問わず京大現代文では頻出だが、問題文の記述内容を抜き出しただけでは対処できず、自分で言葉を補って説明する力が試される。したがって、問題文の記述を手掛かりに、言葉を補って説明する演習を多く積むことが必要である。もちろん、記述問題の中には問題文中の言葉を用いて解答を作成できる場合も多々あるが、少なくとも比喻表現は比喩を用いずに一般化して説明しなくてはならないことを意識しておくべきである。

問四

- ① 「自己の傍らに立って」の具体的内容について、問題文中の「凝結して行く自己を通して此処に今在ることの意味を確かめんとする行為」という記述を踏まえて説明できているかどうかの主眼を置いて採点した。
- ② ポイントB「単なる傍観者として生きるしかない」の説明は概ねできていた印象である。
- ③ 一方で、ポイントAの「自己の存在意義を感じるこ

とができないまま」について言及できている答えは少なかった。同様に「なりたいたい自分になること」も単に「何かに熱中することもなく」という説明にとどまっている。答えが多かった。「何かに熱中することもなく」とは、ポイントBの「単なる傍観者として」と同じ意味である。したがって、「何かに熱中することなく」ではポイントAの得点は認められない。ここは、傍線部二行前の「凝結して行く自己を通して」を踏まえ、第3段落冒頭の「最もそう在りたいもの」という記述をヒントに「最もそう在りたい自分になること・なりたいたい自分になること」といった具体的な説明が必要となる。

④ 「自己」の傍らに立って」という傍線部の表現は、第3段落冒頭の「最もそう在りたいもの傍らに立ち続けていた」を踏まえたものであるのは明らかである。ここから、③でも述べたように「自己の傍らに立つ」を「熱中することなく・何かに自己を賭することもなく・傍観者の態度で」と解釈するにとどまった答えが多く見受けられたが、これでは問二の前半部分の内容を繰り返すだけになってしまう。問三で確認したような、理想とする「かつての労働」に通ずるもの、つまり確実な手応えを

実感でき充実感をもたらしてくれるものを求めて仕事に熱中し、それに自らを賭そうとするという決意が述べられた後での傍線部(4)であることを考慮するならば、やはり「凝結していく自己を通して此処に今在ることの意味を確かめんとする行為」を踏まえた内容として解釈する必要がある。

指導にあたっては、各設問を単なる独立した問題ととらえるのではなく、設問ごとのつながりを理解し、設問の意図を考慮して解答する意識をもたせることが必要である。

問五

① 「私の怒り」が、我が子に向けられた怒りのみならず、自分自身に向けられた怒りであること、すなわち問題文前半の末尾「我が子に対する私の怒りは、……私自身に對する怒りに転化していた」という記述の具体的説明ができていくかどうか留意して採点した。

② 我が子の姿の具体的説明(ポイントA)や、これまでの自分自身の在りようの具体的説明(ポイントB)については、全体的に丁寧な説明できていた。

③ 我が子の姿がこれまでの自分の姿と重なり、我が子への怒りが自身への怒りへと転化した(ポイントC)という、解答の骨組みとなる内容についても比較的書けていたが、言葉足らずになってしまっていたり、要素が足りなかったりして、十分な説明ができていたとは言い難い答案も散見された。たとえば

我が子の姿が自分の姿と重なり、自分に怒りを覚えた

のように、我が子への怒りに触れていない答案や

我が子の姿を見て、自分自身のこれまでの姿に思い至ったから

といった、怒りの転化の説明としては不十分な答案もあった。

④ 全体的に見て、得点できている答案が多いという印象を受けた。ポイントA・Bについて説明できていれば、得点に繋がったからであろう。また、ポイントCも該当する記述が問題文中にあることもあり、それなりに説明できている答案が多かった。言い換えれば、ポイントCを押さえられないと、大きく差がつく設問だといえる。また、ポイントA・Bについては、文章表現の適切

さや、細かい要素への言及といった点で差がつく結果となった。丁寧でわかりやすい表現を心がけることや、解答欄の大きさに合わせたバランスのよい解答を作成するといった指導が必要である。

☆全体的な感想

小説からの出題ではあったが、主要なポイントがある程度押さえられていれば、それなりの得点が期待できる問題であった。特に、最終設問は例年に比べるとかなり解答しやすかったようである。一方で、問一や問三は、問題文中の表現だけでは十分に説明できず、自分なりに言葉を補わなければならなかった分、受験生が書けていない要素が比較的共通しており、点数も伸び悩んだという印象を受けた。文学的表現の解釈の適切さや、文章表現の適切さ、細かい要素への言及といった点で差がつく結果となった。

三 (古文)

16年度の出典は『伊勢物語』。地の文がほとんどなく、和歌が五首並び、そのすべてに設問が設けられるという珍しい構成となった。もちろん漢文が出題されたことも珍しく、やや戸惑った受験生もいたかもしれない。確かに例年と比較すると、和歌五首と漢文の出題といった表面的な^ゝ違い^ゞは見受けられたが、問題文全体の分量としては比較的少なめであり、全体的な難易度も標準的であつたと思われる。したがって、表面的な違いに惑わされず落ち着いて解答できれば、得点に繋げることができただろう。

問一 問題文の「恨むる人を恨みて」を、引用された契沖の

注釈書を参考にして解説する設問。

① 実質的には『勢語臆断』の「恨むまじきに恨むる人を、こなたよりまた恨むるなり」をきちんと解釈できたかどうかのポイントとなる。

③ まず、「恨む」の解釈をほとんどの受験生が間違えていた点が気にかかる。次に、助動詞の「まじ」。これも文脈にそぐわない訳語を書いた受験生が多かつた。これ

らは重要な単語と文法である。月並みではあるが、単語と文法の学習は、ぬかりなくすすめておくべきであろう。

もう一点。設問がやさしかつたせいとか、深読みしすぎた答案も多かつた。たとえば

恨まれる筋合いのない女から浮気を疑われたので、男も女を浮気をしているのではないかと恨み始めたという意味^ゞ

という答案。これは「こなたよりまた恨むるなり」を、「恨むまじきに恨むる」ことの結果とみた解釈である。そこまで書かなくてもよいのだが、設問がやさしいためか、つい蛇足を加えたくなつたのかもしれない。

問二 説話と和歌の内容を対比的に説明する問題。

① 説話(＝漢文)と和歌(＝古文)の内容を正しく理解できているかどうか主眼を置いて採点した。内容としては、一方が恋愛の歌で、もう一方が政治向きの説話である。共通するのは「卵」が出てくることだけなので、これをどのように繋いで答案を書けばよいのか、戸惑つた受験生が多かつたように思える。

実際に、『説苑』の話を『霊公への諫言』ととらえた受験生はほとんどいなかった。大多数の受験生が『危険なこと・危ういこと』としていたが、それは引用された漢文に「危哉」とあるのだから、当然のことであろう。

- ② 受験生の答案を見ると、合理的に物事を考える、よくできる受験生ほど珍回答を書くことがある。たとえば

『説話では卵を積むという行為そのものが愚行であるという物質的な面で卵をとらえていたが、Aの歌では卵を積み上げることが無理だと諦めるように、男を信じてくれない女に対しての悲しみを詠むように精神的な面からとらえている』

などは、古文と漢文とを結びつけようとするあまり、窮余の一策として『物質と精神』とで説明をつけようとしたのだと思われる。古文の解答と考えれば『適当』とは言い難いが、日ごろから現代文の対策に励み、なんとかその知識で対応しようとした気概は汲みたいところである。

- ④ 古文も漢文も、それ単独で読めばさほどに難しい話ではないのだが、「その違いに言及しながら」という指

示語があるため、必要のない深読みしてしまった受験生が多かったのではあるまいか。特に、漢文はセンター試験対策の学習で十分対応可能な難易度であるので、京大入試対策として殊更に漢文の対策をするよりは、今後地道な学習を重ねることが有効であると考えられる。

問三 引用文（『勢語臆断』）の一節を現代語訳する設問。

- ① 引用文の文法事項に注意して現代語訳できているかを主眼に採点した。

② 「消え残るまじき朝露は、なほ残りても有ぬべし」の「べし」の訳出はよくできていた。「べし」の訳し分けは決してやさしくはないが、日頃から注意してとり組んでいるのであろうことがうかがえた。

③ 一方で、受験生には「まじ」が難しかったようだ。確かに「べし」ほど頻出の助動詞ではないかもしれないが、入試では一定の頻度で出題されているので、文法を疎かにしている受験生は対応できなかったようだ。他には、「なほ」の訳し方が不自然な答案も多かった。

次に「誰かあだなる世の人の心を、後までかはらであらんとたのみはつべきとなり」であるが、意外であっ

たのは「あだなる世の人の心」「たのみはつべき」など、つまづくと思われたところはうまく訳せていて、「となり」の部分が訳せていないことである。

江戸時代の注釈書の常套句だが、京大の過去問を解いていけば、一度くらいは目にとめているはずである。古語を学ぶ際は、重要古語集だけではなく、問題文を読みながら語彙を増やすという姿勢を大切にしたい。

問四 比喻の意味を明らかにしつつ、和歌の一部を現代語訳する設問。

① 傍線部(2)(3)とも、比喻表現の意味を正しく理解できているかに重きを置いて採点した。ただし、意外なことに、正しく理解できている受験生はほとんどおらず、したがって多くの受験生が得点できていないと思われる。

(2)

③ ♪吹く風に去年の桜が散らないように、あなたの私を思いう心が変わらないとしても♪といった誤答が多かった。その他にもさまざまな誤答があったが、決して難解な設問ではないことを考慮すると、おしなべて日頃の和

歌対策が不十分であることが原因だと考えられる。

(3)

③ 傍線部「行く水に数かくよりも」の直後に「はかなきは」とあるので、

♪行く水に数かく(はかなさ)よりも♪

と素直にとつてはいけないと思い、

♪流れる水に夫婦で過ごした年数を書くというむなし
い行為よりも♪

のように、あえて蛇足を添えた答案も多く見られた。設問で求められているのは「比喻の意味」を「明らかに」することなので、傍線部は何の比喻か♪を考えなければならぬ。本問に限らず、どの設問においても問題文中に書かれていない(＝そこから推測することもできない)内容を補つてはならないため、設問の意図に注意してほしい。

問五 和歌を現代語訳する設問。

① 「行く水」「過ぐる齡」といった語句の説明、文法事項の訳し方に注意して採点した。

③ 下の句の「いづれ」を「聞く」の主語であると見抜けている受験生と、「いづれ」を目的語ととり、「聞く」の主語を人間だと誤解している受験生とに分かれた。後者の人数が決して少なくなかった点は残念であった。

④ 「散る花」を見て、無常を思うということは、日常の古文学習でもよく見かけることであろうに、それを想起しないのは、学校での国語の授業をよく聞いていないからではないかと思われる。受験のテクニックを磨くのもよいが、まずは足もとを見て、普段の授業にこそ前向きにとり組むことの必要性を理解させることが大切である。
